

DLBSN 東京 「妻の病」上映会・講演会 事務局

■ 報告

1月30日に「妻の病」上映会・講演会を発明会館（虎の門）にて開催しました。当日は約80名の方々にご参加頂きました。

「妻の病」に登場する妻の弥生さんは、2004年に統合失調症と診断され、その3年後にレビー小体型認知症であることが判明しました。「妻の病」はレビー小体型認知症と診断された妻・弥生さんと夫で医師の浩市さんの“いのち”を巡る愛の物語となります。当日は多くの方より「今後の介護のうでで役立った」、「DLBに伴う諸症状を理解できた」、「日々大変ですが頑張ります」などのお声を頂きました。お忙しい中、ご参加頂き多数のご意見を頂きましてありがとうございました。

また、当日は、初期の段階におけるDLB診断の問題点を明らかにし、今後の活動の参考にする為にアンケート調査を行いました。多数の方々にご協力頂きましてありがとうございました。



DLBSN 東京 副代表 市本 洋

■ 講演から

レビー小体型認知症の発見者である小阪先生の約1時間の講演の後、「妻の病」を鑑賞しました。個人的には小阪先生のお話は数回聞かせて戴いていますが、その都度新しい知識と言うか言葉や知見を戴きます。つくづく思うことは、この病気、先生は「びまん性レビー小体病」と表現されていましたが、本当に難しいと言うか厄介な病気なんだなあと思うばかりです。聞けば聞くほど、知れば知るほど、介護職として「何が出来るんだろう？ どう支援を考えればいいんだろう？」とってしまいます。

■ 家族を通してみえてくるもの

今回、改めて大事にしなければと思ったことは、「ご家族はご本人のことを一番分かっている。だから、ご家族にしっかりと話を伺うことがもっとも大事である」というお話でした。医師も介護職もどうしても、その時に目の前に出ている症状のみで、してはいけないこととは思いながらも、どこかで「決め付けている」自分たちがいることに気がつきます。ご

家族は、何十年もご本人と一緒に過ごしており、ご本人のことを一番分かっているし、一番その変化にも気づいているので、まずは「ご家族に話を聞くことが大事である」ということ、そこから治療やケアが見えてくることがあるという学びでした。

■「もし自分だったら…」

「妻の病」は2度目の鑑賞でした。前回はある事業所の会議室でしたので、今回は、映像と言ひ音響と言ひまさに「映画」を観たという印象でした。介護を仕事として行っている場合、もちろん、そう努めよう・考えようとしてはいますが、なかなか「自分ごと」として捉えることが難しいことが多いです。

今回は、介護職というより、「夫婦の物語」として自分に置き換えた場合、自分だったら？と考えました。

考えても、考えても、「どうするだろう？」と言うところからほとんど進みません、これが今の自分の到達点なんだと思っています。自分の妻が、家族が、治療の難しい病気になった時、「自分だったらどうするだろう？何が出来るだろう」と言うことを、少しずつ意識しながら日々を過ごそうと思っています。

レビー小体型認知症サポートネットワーク東京
DLBSN-TOKYO

DLBSN 交流会

レビー小体型認知症 をご存じですか？

パーキンソン病と同じ原因をもつ認知症—「レビー小体型認知症」
病気のこと、ケアのことなど、みんなで学びませんか？悩みを軽くしてみませんか？
患者ご本人、ご家族、ケア専門職、関心を持つ方、どなたでも参加できます。

ナビゲーター
DLBSN-TOKYO
医師 眞鍋 雄太
医師 福井 俊哉
医師 高瀬 義昌
DLBSN-IBARAKI
医師 水上 勝義
.....
代表 長澤かほる

偶数月
火曜日の夜
開催予定

dlbsn.tokyo@gmail.com

2016年度予定

- 4月12日 18:30～ 品川区大井町
- 6月14日 18:30～ 品川区大井町
- 8月9日 18:30～ 世田谷区砧
- 10月 (土) 午後 豊島区近辺
- 11月5日(土) 午前：全国交流会 新横浜プリンスホテル
- 2月 18:30～ 品川区大井町

※ 次回のコラム担当は福井俊哉先生です ※